

奈良平安朝文芸における過去辞が介入する分詞用法

釘貫 亨

〔キーワード〕分詞鼎立 無標識分詞 テンス アスペクト

〔要旨〕上代語において過去義を持つキ・ケリ・ツ・ヌ・タリ・リの中で「咲きたる花」「荒れたる都」のような述部が先行文脈から項を取らず離散的で自立した表現を構成する分詞（形容詞）用法に組織的に介入できたのはタリだけであつた。平安時代以後タリのほかキ・ケリ・リが介入する分詞用法が発達した。テンス表示キ・ケリが過去分詞を構成する例には「古りにし里」「面白かりける夜」など様々なアスペクト表示形態と共起することが多く「見し人」のような単体での介入例の増産に制限があつた。リはなお項を取る性格が強く、分詞用法においては現前事態の進行表示という特徴から現在分詞として機能した。中古語の分詞用法では「咲く花（無標識分詞）」「咲ける花（現在分詞）」「咲きたる花（過去分詞）」のような特徴的な鼎立関係が成立し、以後この分詞の枠組みは「生きる力・生きている証・生きた化石」のような現代語の分詞構造に継承されている。

一 はじめに

古代日本語においてテンス・アスペクトなど何らかの過去義を表示する活用助辞群キ・ケリ・ツ・ヌ・タリ・リ（以下、これを過去辞と称する）の相互関係、とりわけ「キ・ケリ」、「ツ・ヌ」、「タリ・リ」それぞれの意味分析には、多くの研究蓄積があり、特に文末、句末に観察の焦点を当てながら展開して来た。文末

（句末）は、話主の立場が強く現れる位置であるから助辞の特徴的差異が典型的に現れる。研究者がこの位置に注目するのは当然であり、文末句末表現の観察は、中世テニヲハ学以来の伝統でもある。他方、本稿が注目する名詞修飾の位置にもこれら過去辞が数多く出現するのであり、等閑に付されるべきではない。奈良時代語において、タリは、ナリとともに名詞修飾に集中分布することが分かつており、筆者は、以前からこの位置に注目してきた（釘貫一九九八、二〇〇三）。名詞修飾とは、名詞が指示する物事を状態表示することである。リ・タリ・ナリは、存在詞アリが関与することを通じて名詞修飾に特化された役割を担って奈良時代語に登場した。この名詞修飾機能が発展的に拡張して「咲きたる梅の花」「常磐なる松」のような、文脈から離脱して文法項を引き込まない形容詞的用法が発達した。後者の形態は国文法では特異的に「形容動詞」とされる。本稿では、述語動詞が先行文脈から離脱して形容詞のようにふるまう用法を欧文法に倣って分詞的用法と呼ぶ。完了辞リ、タリと断定辞ナリの成立と形容動詞の成立は、日本文法史における一連の事柄である。奈良時代語の過去分詞的用法の唯一の標識がタリであつたが、平安時代以後、キ、ケリが過去分詞的用法の標識として進出した。本稿では、奈良時代と同様、平安時代においてもタリが過去分詞的用法に単独介入する特徴的な性格によって突出して高い機能を持つていたことを論証する。また平安時代以後リが介入する「現在分詞（例 咲ける花）」が確立し、上代以来存在した「無標識分詞（例 咲く花）」、「過去分詞（例 咲きたる花）」のようなアスペクト形式を用いた分詞の特徴的な関係が成立したことを明らかにする。また古代語過去辞キ・ケリが介入する分詞的用法の特徴をタリとの比較から明らか

にする。

二 奈良時代語動詞の過去分詞的用法

名詞が表示する事物の状態を表わすには、「美しい姿、高い山」のような名詞修飾の場合と「姿が美しい」「富士山は高い」のように主格を叙述する場合とがある。事物事態の状態表示という文法的役割が品詞に固定化したものが形容詞と形容動詞である。形容動詞は、名詞修飾に特化的に成立した断定辞ナリが平安時代に「遠か・静か」など状態性体言に接続する機能拡張を生じて成立した。またカリ活用形容詞と呼ばれる一群も形容詞連用形にアリが接する再活用による機能拡張によって成立した。ナリ型形容動詞もカリ活用形容詞も動詞形態を取る。これらは、あたかも古代日本語の形容詞語彙の不足を補う形で歴史的に成立したものである。動詞を用いて形容詞に代わる役割を担わせる方法は、古くから存在した。「飛ぶ鳥」「見し夢」「荒れたる都」の名詞修飾のように動詞を形容詞に転用する場合がそれである。このような転用を欧文法で分詞と呼ぶが日本語にも同じ現象があったのである。時に形態を借りる欧語の分詞と違って「飛ぶ鳥」「咲く花」のような無標識のものを始めとして日本語の分詞は様々な助辞と共に起る。動詞の名詞修飾には、連体形のはか「焼き魚」「死に場所」「取り皿」「勝ち馬」のような連用形によるものがある。連用形による名詞修飾は被修飾名詞と修飾語との意味関係が恣意的で連体形による分詞用法のような所定の統語的關係によって連結されていない。例えば「咲く花」「荒れたる都」「見し夢」などは、「花、咲く」「都、荒れたり」「夢を見き」のような既存の統語構造を前提にして成立する。これに対して動詞連用形は、名詞に転用されるので先に挙げたような雑多な語構成を生み、これらは英語で言へば swimming pool sewing machine のような動名詞による名詞修飾に当たる。英語は、動名詞と現在分詞を形態的に区別しないが、日本語は連用形と連体形が動名詞と分詞を区別する。

本稿が注目するのは連体形修飾による分詞用法であるが、連体形名詞修飾には、二種類ある。一つは「太郎が歩いた道(ガ格)」「バケツを持つ人(ヲ格)」「太郎という男(ト格)」のような述部動詞が必須的の文法項を取るものと「咲く花・壊された扉・負けない野球」のように、動詞が先行文脈に依存せず、形容詞のように振る舞うものである。前者が名詞修飾節であり、後者が分詞用法である。日本語の形容詞形容動詞は述語構成能力を持つので「髪長い女性」のように項を取る連語があるが、本稿では動詞の形容詞への転用に際しての疑問の余地のない形態的環境に置かれたために項を切断した事態を設定する。名詞修飾節と分詞は、日本語では格助詞を取るか取らないかによって消極的に区別されるに過ぎないので、研究者の注意を惹きにくかった。英語では多くの場合関係代名詞が介入する節 clause に対して、分詞による名詞修飾は running man broken door のように現在分詞と過去分詞という専用形態を使用する。日本語の現在分詞は、次節で述べるように平安時代以後「咲ける花」「降れる雪」のような完了辞りが介入した現前事態進行の標識を伴って出現した。「咲く花の匂が如く 飛ぶ鳥の明日香」のような、助辞が介入しない分詞形は奈良時代から存在し、これらは現在分詞ではなく時間を超絶して状態表示する無標識の絶対的分詞といふべきものである。また過去分詞は、「浮いた噂 消された過去」のように過去助辞を伴う。日本語の過去分詞と欧語のそれとの相違は、欧語が受動態標識とともに過去義を含蓄することである。この点が欧語の過去分詞を邦語訳するときに齟齬を来す原因となる。たとえば、受動態標識を兼ねた過去分詞を使用した名詞修飾 broken door を受け身そのままに「破られる扉」と直訳したのでは真意が伝わらず、「破られた扉」と過去辞を補う必要が生じるのは、英語過去分詞が含蓄する過去情報(日本語受け身助辞)が存在しないからである(釘貫二〇〇七)。broken door には、break する動作が過去に行われ、その結果の状態が今に継続するという表示がある。日本語受け身助辞の原義は、自発であり過去ではない。

現代日本語の過去助辞は、タ(タ)一形態であるが、古典語には複数存在する。

古典語の過去辞キ・ケリ・ツ・ヌ・タリなどは、過去分詞を構成する能力が備えられていて一応考えられるが、筆者の調査によれば奈良時代語では、過去分詞を構成できたのが専らタリであった。「万葉集」におけるタリが介入する名詞修飾は全体で五十五例あるがその中で過去分詞の用法は、次の二十四例が確認される。

咲きたる花 咲きたる梅の花 咲き出たる宿の秋萩 咲きたるはねず 残り
 たる雪 雅たる花 後れたる我 照りたるこの月夜 生まれ出でたる白玉
 絶えたる恋 後れたる君 後れたる兎原壯士 たぶれたる醜つ翁 栄えたる
 千代松の木 たみたる道 生ひたるなのりそ 生ひたる梅の木 生ひたるか
 ほ花 荒れたる都 荒れたる家 古りたる君 籠りたる我が下心 落ち激ち
 たる白波 盈ち盛りたる秋の香

以上の諸例の中には「荒れたる・枯れたる」のように多様な文脈で使用される例が幾つも見いだされる。これらは文脈からの離脱性が強く汎用性の高い表現である。タリとの違いが問題になる完了辞リについて、「万葉集」中でリが介入する名詞修飾(九十九例)は形容詞的用法が少なく、文脈から必須項を引きこむ性格を強く有する。次のような例はその典型である。述語部が格助詞ガ・ラ・ニ・ト・マテを取る例をそれぞれ挙げる。

汝が佩ける(波気流) 太刀になりても祝ひてしかも(二十卷・四三四七)
 我を思へる(念流) 吾背子(六・一〇二五)
 雪に混じれる(末自例留) 梅の花(五・八四九)
 丈夫と思へる(念流) 我(四・七一九)
 光るまで降れる(零流) 白雪(十七・三九二六)

これに対して、先行文脈に依存しない分詞用法の可能性がある例は、「万葉集」中では次の六例である。

咲ける(佐家留) 梅の花(五・八五〇) 咲ける(開流) 萩(八・一五三) 立
 ち待てる(立待留) わが衣手(二三・三二八〇) さ馴らへる(左奈良徹流) 鷹

(十七、四〇一) 徳はせる(思努波勢流) 君が心(十七、三九六九) さどはせる(左
 度波世流) 君が心(十八、四一〇六)

リが介入する分詞の用法は、現前に進行する事態を表示する点に特徴があるとされておき、後述するようにこれは現在分詞的用法とすべきである。

以上、タリが介入する名詞修飾が「万葉集」五十五例中、形容詞的用法が二十四例に対して、リが介入する名詞修飾九十九例中、分詞的用法が六例である。タリは明らかにリに比べて過去分詞的用法に転用されやすい。タリが介入する過去分詞的用法には、「荒れたる」「枯れたる」「絶えたる」など離散性の強い表現が数多く存在する。「万葉集」の「荒れたる」は「都」「家」「宿」など複数の名詞を修飾するが、現代語過去分詞「荒れた」も同じように「肌・教室・町・国会・関係・土地・寺」などおよそ縁遠いカテゴリーの名詞を修飾することが可能である。このようにタリ(タ)は、文脈から離脱的で汎用性が高く抽象的な用法に強く傾くのである。このようなタリとリの違いは、現代語のタ(タ)とテイルとの違いに相当するだろう。現代語のテイルは、過去情報を持たず現前の事態進行を表示することが多い。また現代語のテイルは、タに比べて分詞的用法があまり観察されず、項を引き込む性質が強い。タは先述の「浮いた噂」「消された真実」などのほか、「利いた風なこと」「洒落た関係」「傷ついた友情」「壊れた罪」などの汎用性の高い表現がいくつもあるのに対して、テイルが介入するこの種の離散的な連語は、「生きている証」「混んでいる電車」「沸いている会場」など文脈によつては可能であろうが数多く連想できないし、熟した離散的な用法とも思えない。これは、テイルが古代語のリと同じく先行する文脈から項を引きこむ性質を強く持っていることを示すのではなからうか。テイルに対するタの文脈離脱的性質は、金水(一九九四)が現代語の観察でタ形による修飾が動作性を背景化し状態性を前景化する、と指摘したことに合致する。つまり動詞の形容詞的用法は項を取らないことから文脈から離脱的な性質を伴って本来の動詞としての性質を希薄化するのだと思われる。現代語形容詞「高い」は、「山・建物・価値・時計・水準・志・

条件・割合」など多様なカテゴリーにまたがる多数の名詞を修飾することができ
るが、これと同じ現象が分詞の用法において出現するのである。

古代語のりが現前事態(事態進行)の描写に用いられることは、複数の研究者
による指摘がある(吉田一九九三、野村一九九四ほか)。そうであれば、現前で
進行する事態を叙述するためにりが介入する動詞句が文脈から離脱しにくい性質
を持つのは当然である。この悪条件を押し下り「咲ける花」のように分詞的
用法に転用される際には生起した作用が現前に進行していることを表す現在分詞と
して実現する。この段階でりが含意した過去義が解消される。これに対して「咲
く花」のような名詞修飾は、時間を超絶して事物を状態表示するものであり、筆
者が無意識分詞と考える用法である。りの現在分詞的用法は、三代集にまどま
つて出現している。りを標識とする現在分詞用法は、奈良時代に萌芽しており、平
安時代に確立した。このことは次節で述べる。

『万葉集』中に過去回想の助辞キが介入する名詞修飾は筆者の調査によれば
四四九例存在するが、次の七例が格助詞に後続しない過去分詞的用法の可能性を
持つ連語である。

愛しきやし榮えし(栄之)君(三、四五四)夕されば物思ひまさる見し(見
之)人の言問ふ姿(四、六〇二)都の人に告げまは見し(美之)日のごと
く(二十、四四七三)空蟬の人か禁ふらむ通はしし(通為)君(四、六一九)
日の重ならず植えし(宇恵之)田も蒔きし(麻吉之)畑も(十八、四二二二)
かくさまに成り来にけらし掘えし(須恵之)種(十五、三七六一)

これらの例はいずれも動作が過去の時点で完結し、その結果が継続しているこ
とを表しておらず、動作作用が表出時点より過去に行われたことつまりテンスだ
けを表示しているように思われる。現代語でいえば「浮いた噂」「壊された罪」
などは、過去の作用の結果が発話時まで継続するアスペクト的性格を強く持つ
のに対し、同じタでも「見たことだけを話せ」「担任した生徒と街で遇った。」な
どは、テンスだけを表していると考えられる。古代語では、タリとキがこの対立

を担っていた。

キが介入する過去分詞用法は、『万葉集』では完了辞リ、又や断定辞ナリ、存
在詞アリ、形容詞カリ活用などと連結しながら結果継続表示を実現することが多
い。

古りにし里(古尔之)里(二、一〇三)古りにし(古之)唄(二、二二九)生
ひざりし(不生有之)草(二、二八二)思へりし(念有之)妹 頼めりし(恃
有之)子(二、二二三)頼めりし(恃有之)奈良の都(六、一〇四七)頼めり
し(憑有之)人(三、四六〇)常なりし(都称奈利之)咲まひ(五、八〇四)
若かりし(若有之)肌 黒かりし(黒有之)髪(九、一七四〇)含めりし(布
敷買里之)花(二、四四三五)

『万葉集』では、アスペクト表示の文法形式と連結したキの右のような統辞法は、
十二例観察される。これらは、過去辞キにアスペクト表示を補われた疑問の余地
のない過去分詞的用法である。要するにキは、『万葉集』中の夥しい用例にもか
かわらず単独で過去分詞的用法を構成することが非常に少ないのである。ケリが
介入する過去分詞的用法は、『万葉集』では次の一例だけである。

帰りける(可徹里家流)人來たれりと言ひしかば殆と死にき君かと思ひて
(十五、三七七二)娘子

ツとヌについては、単独で名詞修飾に介入するこの種の連語は『万葉集』では
見出されない。このようにキ・ケリ・ツ・ヌ・リは、単独で分詞的用法が構成さ
れることが抑制されている。これに対してタリが介入する過去分詞的用法は、ほ
とんどが単独で出現している。このような対照的傾向は、平安時代以後いかなる
展開を遂げたのであろうか。

三 三代集における分詞用法の特徴

本節では、前節『万葉集』と同様の調査を同じ韻文文献であり隣接する時代の

『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』の三代集で行う。『古今集』においてタリが介入する過去分詞用法は、次の八例である。

隠れたる所・すぐれたる人・得たる所(仮名序) 荒れたる宿(巻四) うきたる恋(巻十二) なぎたる朝・焼けたる茅の葉(巻十五) 荒れたる家(巻十八)

リの現在分詞的用法は、次の十二例である。

よめる歌 しほめる花(仮名序) 折れる桜(巻二) さける(さかさる)花・うつろへる花(詞書)(巻二) 刈れる田 ふれる白雪(巻六) くらせるよひ(巻十一) 通へる袖(巻十二) さらせる布(巻十七) たてまつれる長唄(巻十九)

又の過去分詞的用法は、次の八例である。

あけぬる夏の夜(巻三) 泣きぬる雁(巻四) ちりぬる奥山の紅葉(巻六) 思ひたちぬる草枕(巻八) 明けぬるもの ねぬる夜の夢(巻十三) 経ぬる夜 消ぬる泡(巻十五)

ツが関与する分詞的用法は『古今集』では認められない。

『後撰集』では、タリの過去分詞用法は、次の十八例である。

荒れたる所(巻三詞書) 荒れたる宿(巻八) 忍びたる女(詞書) 忍びたる人(詞書) せかれたる山水(巻九) 末もみじたる枝(巻十詞書) 浮きたる恋(巻十一) 寝たる夜の夢(巻十二詞書) 見慣れたる女(巻十三詞書) うつろひたる菊(十三詞書) 留め置きたる笛(巻十四詞書) 定めたる男(巻十五詞書) 忍びたる方(巻十五詞書) 荒れたる様(巻十五) 定めたる妻(巻十七詞書) 荒れたる波の花(巻十七) 知りたる人(巻十八詞書) 並み立てる松(巻二十)

リの現在分詞的用法は、次の十二例である。

沈めるよし(巻一詞書) 咲ける藤波(巻三) 降れる雪 咲ける卯の花(巻四) 折れる秋萩(巻六) 咲ける菊の花(巻七) 心ざせる女(巻十詞書) 摺れる狩衣(巻十一) 知れる人 かよへる文(詞書) あひ知れる人(巻十六詞書)

ツの過去分詞用法は、次の五例である。

鳴きつるなへ(巻五) わびつる唐衣 経つる年月(巻十) 別れつる程(巻十一) まがへつる月影(巻十五)

又の過去分詞用法は、次の十例である。

散りぬる花(巻三) 干ぬる潮(巻九) 鳴きぬる鶯 行き帰りぬる声(巻十二) 厭ひ果てぬる物 吹きぬる秋の風 逢ひぬる白雪(巻十二) なれぬる物(巻十四) 過ぎぬる方(巻十九詞書)

『拾遺集』におけるタリの過去分詞用法は、次の十八例である。

荒れたる宿(巻三詞書) 散り残りたる紅葉(巻四詞書) 別れ惜しみたる所(詞書) こめたる水(巻七) 散り乱れたる河の舟(巻八) 知りたる人(巻九詞書) 絶えたる恋(巻九) 後れたる双葉の草(巻九) 枯れたる枝(巻九) 神さびにたる浦の姫松(巻十) ならべたる千代のためし(巻十) 懸想したる所(巻十三詞書) 似たる物(十三詞書) 寝たる夜(巻十三) むすはほれたるわが心(巻十三) かた餉ひしたる陸奥のこま(巻十四) 泣きたる形(巻二十詞書) 飢えたる人(二十詞書)

リの現在分詞的用法は、次の十一例である。

咲ける藤花 降れる雪 咲ける卯の花(巻二) すれる衣(巻四) すめる月(巻八) とまれる方(巻九) 切れる杖(巻十) 生ける日(巻十一) 変れる物(巻二十) あひ知れる人(巻二十) 臥せる旅人(巻二十)

ツの過去分詞用法は、次の二例である。

のどけかりつる春(巻二) たちならしつる蘆鶴(巻八)

又の過去分詞用法は次の四例である。

上りぬること(巻九詞書) 消えぬる雪(巻十二) 忘れぬる君(巻十五) 止みぬるみ吉野の松(巻十六)

以上、『万葉集』と比較した三代集の特色は、タリ以外のツ・ヌ・リなどが介入した分詞用法の進出が挙げられる。特に注目されるのは、奈良時代語において

リは文脈から文法的項を強く引き込む性質を持っていたが、平安時代以後、分詞の用法を獲得するに至った。その結果、現前事態進行という表示によってリが介入する形容詞用法は現在分詞として機能した。リとタリは、統語構造に由来する相違によって並立したと見られる。以来日本語動詞の現在分詞と過去分詞は、英語のような現在分詞と過去分詞の対立ではなく、無標識・現在・過去の鼎立関係が特徴となった。この分詞鼎立は、現代語の「生きる力」「生きている証」「生きた化石」などの鼎立関係として継承されている。

『万葉集』と同様に三代集のタリは、キ・ケリ・リに比べて出現数においてさほど多くはない。しかし、仮名序、詞書、和歌を合わせた三代集のタリの総出現数一〇六のうち、四十四例と高い比率での過去分詞用法への傾きを見せる。しかもタリが介入する過去分詞用法のほとんどが奈良時代と同様にタリ単独での介入例であることは右の実例の通りであり、そのことは次に述べるキ・ケリの介入例と比較してきわめて特徴的である。そこで三代集で過去分詞として多数の用例を持つキとケリに注目したい。次に挙げるのは「古今集」に見いだされるキが介入する過去分詞の用法の例である。

- むすびし水(巻二) 見し君 待ちし桜 散りにし花 すぐしてし昔(巻二)
 別れにしふるさと なきふるしてし郭公(巻三) いにし雁がね(巻四) 植えし時 さきそめし宿(巻五) 入りにし人(巻六) 来にし心(巻八) なれにしつま こし数(巻九) ふりにしこのみ 散らしし風(巻十) 見てし人(巻十一) こし夜 別れし暁 寝しもの(巻十三) 思ひし心 頼めこし言の葉(巻十四) 別れしあした うゑていにし秋田 言ひてしこと(巻十五) ふりにし里 さきそめし時(巻十七) 住みこし里 見しごと あかざりし袖 思ひてし思ひ ふりにし恋(巻十九) 古りにし事(序)

右の例では、完了辞又、ツ、否定辞ザリなどと共起する例が多い。キ単体で介入する例は、三十二例中十一例である。その単体介入例のうち、上接動詞自体で継続アスペクトを表示するのは、「すぐす・往ぬ・咲き初む・泣き古す・頼め来」

などである。

次は「古今集」において観察されるケリが介入する過去分詞の用法である。こでのケリの用例は全て序文と詞書にあり、和歌の用例は存在しない。

- たてまつりける歌 采女なりける女(仮名序) やどりける人 とはざりける人 まうできたりける人(巻二) あひ知れりける人 わづらひける時(巻二) すみける所 おもしろかりける夜(巻三) やどれりける所(巻六) かりける時 まかりいでけるをり 別れける時 別れけるをり わかれける所(巻八) そこなりける人(巻十) いへりけることば(巻十二) 齋宮なりける人 思ひをりける間 あひ知れりける女(巻十三) おこせたりけるふみ(巻十四) おもしろかりける夜(巻十五) すみける帳 弱くなりける時(巻十六) ありける歌 遊びける日(巻十七) 時なりける人 越なりける人 大和の国なりける人(巻十八) いとこなりける男(巻十九)

右の例では、断定辞ナリ、否定辞ザリ、完了辞リ、タリ、形容動詞、カリ活用形容詞、存在詞アリ、ヲリなどと連結して用いられることが多い。ケリが単体で介入する例は、全三十例中十例である。そのうち上接動詞がアスペクト表示する語は、「宿る・まうで来・まかりいづ」などである。

次に『後撰和歌集』のキが介入する過去分詞用法を挙げる。

- 枯れにし枝 植えしかひ 濡れにし袖 たのめし人(巻二) うゑし時(巻二) 見し人 ふりにし色 ふりにし里 にほひし事 見し花 来にし方(巻三) いひそめし昔の宿の杜若 散りにし花(巻四) たのめこし君(巻五) 過ぎにし君(巻六) 結びおきしわが下紐 あはざりし時 いかなりし物 ありし時 染めしたもと たのめし人(巻九) 言ひし言の葉(巻十) せし我がかね事 入りにし人 荒かりし浪 ふりにし床 誓ひてし言(巻十一) 見し夢 待たざりし秋 見し人 うつりはてにし菊の花 立ち帰りにし白浪(巻十二) ありかせし昔 ながらの我が身 憂かりし物(巻十三) 絶えたりし昔 知らざりし時(巻十四) 引きて植えし人(巻十五) 誓はれし賀茂の河原 かづき

てし沖の藻屑 立ち騒がれしあだ浪 いかなりし節 結びおきし形見(巻十六) 別れにし程 結びおきし種 引き植ゑし二葉の松(巻二十)

右によればキは完了辞タリ、ツ、ヌ、否定辞ザリ、断定辞ナリ、存在詞アリ、カリ活用形容詞、使役辞ス、受け身辞ルなどと共起する。キ単体で動詞に接続するのは、全四五例中七例である。その七例の単独介入例のうち上接動詞自体がアスペクト表示するのは「いひそむ・たのめ来・結びおく」である。次に「後撰和歌集」のケリが介入する過去分詞用法を次に挙げる。

かれにける男 住みける方 かよひ住み侍りける人(巻二) しのみたりける男 忘れ侍りにける人(巻二) おもしろかりける夜 あひ知れりける人 まうで来かよひける所(巻三) かへりにける人 絶え侍りにける女(巻四) あひ知りて侍りける女 申しけるついで(巻六) あひ知りて侍りける男 あひ知りてはべりける人 忘れにける男(巻七) しのみたりける人 あひ待ちける人 え逢はずありける女 つらくなりにける人 つらかりける男 まからずなりにける女(巻九) 若かりける女 言ひかはしける女 通はし侍りける人 え逢ふまじかりける人 あはざりける女 言ひわたり侍りける女 通ひ行ひ侍りける女 出でける家(巻十三) 見えける男 逢へりける女 住み侍りける女 あひ語らひける人 え逢はざりける人 言ひ送りける返事 通ひける人(巻十二) 忘れにける女 つらくなりにける男 あひ住みける人 つらかりける人 忘れ侍りにける女 まかり通ひける女 をとづれしけるやまびこ(巻十二) つれなく見え侍りける人 逢はざりける男 とはざりける人 えがたう侍りける女 ただなりける時 まうで来たりける男 まかりける女 通ひ侍りける人(巻十三) 言ひ交しける男 つれなく侍りける人 逢ひにける女 頼めたりける人(巻十四) 出で侍りにける後(巻十五) 若う侍りける時 持て侍りける笛(巻十六) 面白かりける 女語らひける女 友達なりける女(巻十七) あひ知りたりける女 蔵人 たのみて侍りける男 言ひ騒がれける頃 隣りなりける琴 つらかりける男(巻十七) 住み侍りける所 恋ひ

侍りける間 なくなりにける人 法皇の御服なりける時 なくなりて侍りける人 思ひける人(巻二十)

右のうちケリは、完了辞リ、タリ、ヌ、カリ活用形容詞、存在詞ハベリ、アリ、否定辞ザリ、断定辞ナリなどに接する。ケリ単体で動詞に接続する例は全七十二例中十四例である。そのうち動詞自体がアスペクト表示するのは「待つ・言ひわたる・出づ・語らふ・言い通ふ・通ふ・まかり通ふ・まうで来」などである。以上のケリの用例は、すべて詞書での用例であって和歌の用例は次の八例である。

祈りけるみな神(巻九) かりける人の心(巻十) ながらへにける身(巻十三) 経にける年(巻十四) へだてける人の心(巻十五) 経にける年(巻十七) 経にける年月(巻十七) 過ぎにける人(巻二十)

右のうちケリ単体で介入するのが二例であり、上接動詞は、「祈る・へだつ」である。その他は、カリ活、完了辞ヌ(経にける、過ぎにける)に接する。

次に「拾遺和歌集」でキが介入する過去分詞用法を次に挙げる。

散りにし梅(巻二) 住みし津の国(巻四) 別れし人(巻六) 忘れにし人 いにし人 別れし人(巻七) なれにし影 教へし人(巻八) 足らざりし時はの山 たちし朝霧 ちざりし事 出でし道 頼まれし末の世 かき流されし神無月(巻九) 見し豊の靉 頼めし程(巻十二) ありにし物 寝し時 有りにしもの 帰りし宵 枯れにし水 結びし袖(巻十二) いかなりし時 蒔きし種(巻十三) ふりにし恋 誓ひてし人 入りにし奥山(巻十四) 思ひそめてし紅の人(巻十五) 飽かざりし君 去にし年 植ゑし我が宿の若木の梅 咲きし時(巻十六) 帰りにし雁 ふりにし宿(巻十七) ありにし物(巻十八) 着てし濡れ衣 頼めし事 別れし人(巻十九) 消えにし人 相見し妹 見えし我 賜ひてし乳房(巻二十)

右の例ではキは、完了辞ヌ、ツ、否定辞ザリ、受け身辞ル、断定辞ナリに接する。キ単体で介入する例は全四十三例中十六例である。そのうち上接動詞自体がアスペクト表示するのは「住む・別る・去ぬ・出づ・思ひそむ」である。

次に「拾遺和歌集」においてケリが介入する過去分詞用法を挙げる。

- 童なりける時(巻二) まかりかへりけるあか月(巻六) 住持し侍りける法師(巻七) あひ語らひ侍りける人 嘆き侍りける頃 流され侍りける道 加階し侍るべかりける年(巻八) 親しく侍りける男 描き置きたりける絵(巻九)
- 懸想し侍りける女 契りけること(巻十一) 逢ひ侍らざりける日(巻十二) 承香殿女御の方なりける女(巻十五) 流され侍りける時 侍りけるまま(巻十六) 経にける秋(巻十七) 渡りはじめける頃 懸想し侍りける人 語らひける人(巻十八) 逢ひて侍りける女 言ひ契りて侍りけること まうで来ざりける男 懸想しはじめて侍りける女 まからざりける女(巻十九) 亡くなり侍りにける後の年 生み奉りたりける親王 あひ知りて侍りける女 帰り侍りけるついで 行ひし侍りける人 え起き侍らざりける夜の夢

右の例でケリは断定辞ナリ、存在詞ハベリ、否定辞サリに接続している。また、ハベリに接続する例が目立っているが、これらは全て詞書 の例であり、ハベリは談話敬語と言われるように話し言葉で用いられると言われているので、ケリが和歌より談話において好んで用いられたという推測が成り立つ。ケリが単体で介入する例は、全三十例中六例である。そのうち上接動詞自体がアスペクト表示するのは「侍り・渡りはじむ・語らふ・まうで来」である。右の挙例は、すべて詞書のものであり、和歌の用例は、次の三例である。

- みがきける心(巻十) うかりける節(巻十四) 散り果てにける梅の花(巻十六)

右のうちケリ単体での介入は「みがく」一例であり、残り二例はカリ活用と完了辞ヌが共起している。三代集の結果によれば、キ・ケリ単独での過去分詞用法の増産には明らかに制限が認められる。この実態は、テンス表示であるキ・ケリが接する動詞述語が動作性を強く保存するが故にアスペクト形式と連結することなしに名詞を状態表示しにくかったためであると考えられる。またケリの過去分詞用法に和歌の用例が極めて少ないが、この事実「万葉集」中のケリが介入す

る過去分詞用法が僅か一例であったことと同じ特徴である。以上の三代集のキ・ケリの分詞用法の傾向は「万葉集」の様相の延長上にある。

四 王朝散文における過去分詞用法の特徴

本節では平安時代語における過去分詞用法を供給する三大勢力であるキ・ケリ・タリに焦点を絞って当代語の口語の実態を色濃く反映する散文文芸における実態を観察したい。筆者は、キ・ケリ・ツ・ヌ・タリ・リが介入する名詞修飾についてすでに「源氏物語」を資料にして調査を行っている(釘貫二〇〇八)。「源氏物語」では、名詞修飾に過去辞が多数出現し、分詞用法とらしい連語が増加している。その結果を次表1に挙げる。

表1

	補助	起点	方向	目的	引用	主格	分詞	合計
り	7	14	116	114	36	148	398	833
たり	9	19	181	181	55	183	915	1543
ぬ	6	12	34	13	2	32	61	149
つ	1	2	15	16	12	25	114	171
けり	45	8	65	37	36	72	237	500
き	54	16	144	101	129	181	750	1375

表の右軸に、動詞述語が要求する文法項に基づいて六種の意味役割を配しているが、格助詞との代表的な対応関係は「補助ニ・起点ヨリ・方向へ・目的ヲ・引用ト・主格ガ、ノ」である。表1によれば本テクストにおける過去辞が介入する名詞修飾全体の中でタリの占める割合が第一位で高いことが分かる。中でもタリ

の全一五四三例中九一五例が分詞用法である。そこで「源氏物語」冒頭二巻「桐壺」「帚木」に現れるタリ介入型分詞用法を次に挙げるが、この中には自由度が高古典文芸で何度も使用される表現を幾つも見いだすことが出来る。物語における全例については拙稿(二〇〇八)を参照されたい。

唐めいたるよそほひ 言ひかはしたることども(桐壺) 軽びたる名 おしなべたるおほかた もて離れたること うめきたる気色 わるびたること 出でたること うちとけたる後見 世離れたる海づら 作りたるもの やわらいだるかた 後れたる筋 従ひおじたる人 萎えたる衣 荒れたる崩れ 今めきたるもの声 踏み分けたる跡 掻い弾きたる爪音 荒れたる家 恨みたるさま すきたる罪 うちとけゐたる方 さし過ぎたること 乱れたるところ 定まりたること 枯れたる声 おしなべたるつら すぐれたること 見あつめたる人 なまめきたるさま およすけたること うちとけたる御答(帚木)

キもまたタリに拮抗して多数の例を持つがタリとどう違うのであろうか。次に挙げるのは、「桐壺」「帚木」に現れるキ介入型過去分詞用法の例である。

もてなさせたまひしほど 生れし時 御覽じはじめし年月 かよひたりし容貌 おはしましし時 亡せたまひにし御息所 もてなされにし例 よそほしかりし御ひびき ありしやう(桐壺) 見そめし心ざし 思ひはべりしやう あひ見しこと 見せしあひだ まかり通ひし所 見はべりしほど 掻きあはせたりしほど 見そめたりし人 見つべかりしけはひ まからざりしころ とだえおきはべりしほど かかづらひはべりしほど ありし中納言 見し夢のたまはざりしもの ほのかなりし御けはひ 思へりし気色 過ぎにし嗅き(帚木)

次は「桐壺」「帚木」におけるケリ介入型過去分詞用法である。
つらかりける人 かなはざりける命 思しよりにける筋(桐壺) 忍びたまひける隠るへ事 思ひいたらざりけること はしたなかりける御物語 をかし

かりける女 寝たりける声 思し下しける御心はへ いぎたなかりける夜 いみじかりけること めづらかなりける心(帚木)

右のキとケリの分詞用法は、タリと異なつて、完了辞ツ、ヌ、リ、タリ、断定辞ナリ、否定辞ザリ、カリ活用形容詞などアスペクト表示の諸形態と共起する例が多いことが明らかである。単体で介入する例でも「はじむ」「初む」「在り」など上接動詞そのものがアスペクト表示する例が注意され、この特徴は三代集と共通する。本節では、調査範囲を拡大して平安時代の散文文芸作品「枕草子」「蜻蛉日記」「和泉式部日記」「紫式部日記」を調査した。次に示すのは、「枕草子」に見いだされるタリ単独介入型の過去分詞用法全二七五例からランダムに取り出した三十一例である。三十一例を取りだしたのはキの全例三十一の実態と比較するためである。

紫だちたる雲 咲きたる桜 くもりたる夕つ方 しのびたる所 忌みたるやう 騒ぎたるこゑ ぬたる犬 晴れたる空 おほひたる綿 生きたるものども 時めきたる所 知りたること 見しりたる人 わすれたる所 老いたる女 黒みたるもの 肥えたる人 瘦せたる人 ゑみたる顔 田舎だちたる所 うち古めきたる人 老いばみたる者 聞こえたる事 しみたる衣 枯れたる葵 書いたる女絵 張りたる白き単衣 立てたる車 萌え出でたる葉末 帰りにたる人 思ひたる人

次は「枕草子」のキ介入型分詞用法全三十一例である。

ありし者ども あはれなりし人の文 とありし事 かかりし事 いひそめてし人 みだれさきたりし花 ありしやう いひあはせたりしこと 寝おびれ起きたりしけしき 契りきこえしかた いづこなりし天下り人 行きたりしかぎり 聞きし声 やみにしこと ありし事 伏し拝みたまつりしこと うれしかりしもの ねたがりいひし中将 ありしあかつき あはれなりしこと わすれにし人 ぬたりしもの いひたりし人 隠させ給ひし事 出でさせ給ひし夜 多かりしことども いみじかりしをり 過ぎにしこと 過ぎに

しかた をかしかりしもの 端のかたなりし疊
 次は「枕草子」のケリ介入型分詞用法の全十三例である。

御物忌なりける日 たのみけるもの ねたかりけるわざ いそぎける七夕
 ものぐるほしかりける君 おもしろかりける所 えならざりける水 わるか
 りける女房 さりけるもの あやしかりけること きはぎはしかりける心
 右衛門の耐なりける者 あさましかりけること

右のキ・ケリが介入する分詞用法は、存在詞アリ、断定辞ナリ、完了辞ツ・ヌ・タリ、カリ活用形容詞、否定辞ザリなどに接続している例が多い(キ・ケリ全四十三例中二十五例)。この表態もまた三代集と「源氏物語」に共通する。また「蜻蛉日記」「和泉式部日記」「紫式部日記」におけるタリ・キ・ケリの過去分詞用法の実態も同じ傾向にあり次表2として示した。

表2

日茶式部記			和泉式部日記			蜻蛉日記			枕草子			
ケリ	キ	タリ	ケリ	キ	タリ	ケリ	キ	タリ	ケリ	キ	タリ	
1	2					1	11		1	5		アリ
	2						2		2	4		ナリ
	4						3			6		タリ
	2		2	1		4	4		7	5		カリ活
			1	1			2		1			ザリ
						3	1			1		ツ
			1	2			3			4		ヌ
							1					メリ
							1					(ル)
												(ヌ)
1	5	57		7	19	8	32	157	2	6	175	単独
2	17	57	4	11	19	16	60	157	13	31	175	合計

以上により平安時代仮名文芸におけるタリ、キ、ケリが介入する過去分詞用法の特徴がほぼ明らかになる。すなわち単独で介入する過去分詞用法において突出した用例数を持つのがタリである。これに対してキ、ケリが介入するそれは、完了辞、カリ活用形容詞、存在詞、断定辞、否定辞ザリなどアスペクト表示形式と

共起する傾向を持ち、単独で分詞用法に介入することが著しく制限されている。単独介入例であっても「ありしやう」「とどめ置きける露」「思ひはじめけるより」「つきそめしたれかよつま」など上接動詞がアスペクト表示する例が目立っている。このことは、テンス表示であるキ・ケリが分詞用法に関与する際に述部がアスペクト形式と共起して形容詞化することへの強制が働いたことを示している。

本稿が観察したこの傾向は、調査範囲を王朝和全文体に拡大しても恐らく動かないだろう。
 一連の事実は、名詞修飾においてタリが動作の結果継続を表すのに最も一般的な標識であったことを示している。タリが単独介入する多数の過去分詞句の中から次第に熟した文脈離脱性の高い表現が数多く産出されたと推定される。文脈とその背景事態が規定する微細な意味を他の過去辞が担ったのに対してタリは、文脈から離脱的で一般的な表示に特色を發揮したに違いない。

タリ介入型過去分詞は、奈良時代に発し、平安時代に飛躍的な発達を遂げた。平安時代語の名詞修飾述部の単体タリの圧倒的優位は、このような歴史的拡張の結果である。平安時代以後、リは現在分詞の標識形態として組織的に登場し、これによって日本語動詞は既存の無標識分詞を基点とする過去分詞・現在分詞の系列を獲得した。留意すべきは、このような日本語の分詞系列が単線構造ではないという点である。現在・過去分詞のほか上代語では受け身助辞が介入する分詞「射ゆ(所射)猪をつなく川辺の・万葉集三八七四」意思推量助辞が介入する分詞「言はむ(牟)すべ為む(武)すべ知らに・七九四」恋ひ死なむ(牟)後は何せむ・五六〇」がある。現代語でも「有るべき姿」「存在するだろう正解」「隠される現実」「読ませる文章」「見果てぬ夢」などの当為・推量・受け身・使役・打ち消し

など複雑な分詞系列の存在が予想される。「ある日」「立つ鳥」「走る車」「聞く耳」などの無標識分詞と併せた諸現象の解明は今後の課題となる。

〔注〕

注1 印欧語を始めセム語アルタイ語などにも動詞の形容詞転用があり、通言語的な現象である。本稿ではこの点を配慮し、一般言語学的な観点から分詞の語を使用する。

注2 日本語において動詞と形容詞は形態の違いという断絶面とともに意味的には連続している。その意味差の最大の環境として項が切断された位置を設定した。

注3 この離散化が進行して品詞に凝縮することもある。例えば現代語「洒落た関係」の動詞部は活用が衰退しており「洒落た」は形容詞化が進行していると推定される。

〈引用文献一覽〉

- 釘貫亨（一九九八）「完了辞リ、タリと断定辞ナリの成立」『萬葉』第一七〇号
 (二〇〇三)「奈良時代語の述語状態化標識として成立したリ・タリ・ナリ」『国語学』第五四卷五号
 (二〇〇七)「動作の結果継続を表す名詞修飾の歴史的動態」『名古屋大学国語国文学』一〇〇
 (二〇〇八)「源氏物語」における過去分詞的名詞修飾の一典型」『HERSETEC テキスト布置の解釈学的研究と教育』Vol.2No.2名古屋大学文学研究科
 金水敏（一九九四）「連体修飾の「〜タ」について」田窪行則『日本語の名詞修飾表現』（くろしお出版）
 此島正年（一九六六）『国語助動詞の研究』（桜楓社）

吉田茂晃（一九九三）「存続の助動詞」考一萬葉集の「リ」について一『萬葉』第一四九号

野村剛史（一九九四）「上代語のリ・タリについて」『国語国文』六三一—鈴木泰（二〇〇九）『古代日本語時間表現の形態論的研究』（ひつじ書房）

〔使用テキスト〕万葉集（鶴久、森山隆編）『万葉集』おうふう）三代集（新日本古典文学大系、岩波書店）、源氏物語（阿部秋生、秋山虔、今井源衛校注日本古典文学全集、小学館）土佐日記・かげろふ日記・和泉式部日記（鈴木知太郎、川口久雄、遠藤嘉基、西下経一校注日本古典文学大系、岩波書店）枕草子・紫式部日記（池田亀鑑、岸上慎二、秋山虔校注日本古典文学大系、岩波書店）

〔付記〕本稿は、平成二十三年度科学研究費基盤研究（c）による研究成果の一端である。